



研究の
Forefront of research
最前線

鍵を渡そう さあ 学生たちよ 世界へ通じる 窓を開こう

グローバル・コミュニケーション学部 グローバル・コミュニケーション学科 助教

ムートン・ジスラン・フィリップ・ゴントラン
(MOUTON GHISLAIN PHILIPPE GONTRAND)

専門は外国語教育、異文化間教育、フランス語教育。日本のアニメや漫画を楽しみながら日本語に親しみ、高校の第3外国語で日本語を選択。フランス国立リール第3大学大学院で日本学を専攻した。沖縄国際大、琉球大、沖縄大等の非常勤講師を経て、22年4月から現職。23年4月からは京都大学大学院博士後期課程で学ぶ。趣味は柔道とバスケットボール。日本に来て日本酒と温泉が好きになり、今も週2、3日のペースで銭湯に通う。

教科書の 「自文化」「他文化」 比較を研究

日本の大学でフランス語はどのように教えられているのか、ここ35年ほどの教科書の変遷を調べている。「日本での授業は長く『文法』『講読』が中心でしたが、1990年代になると『コミュニケーションタイプアプローチ』（コミュニケーション能力の向上を重視した学習法及び教授法）が導入され、教科書も4技能（聞く・話す・読む・書く）をまとめたものへと変わってきました。この間に、教科書で日本とフランスの文化はどのように比較されて書かれているのか、例文を拾い上げ、データベースを作ろうとしています」

興味を覚えたのは、日本の教科書ではフランスに批判的な例文がほとんど見られないこと。「他国の教科書では『パリの街は汚い』といった文が少なからずありますが、日本ではむしろ『フランスのワインは日本のお酒よりおいしい』など、フランスを持ち上げるような記述が多い。こうした教科書で学んだ学生はフランスにどんな印象を持つのか、教員はどう考えているのか。様々な人にインタビューし、異文化間コミュニケーションがどのように形成されるのかを明らかにしたいと

考えています」。こうした研究は日本にはまだほとんどなく、その成果は次世代の教科書のヒントになると、教科書出版会社からも注目されているそうだ。



日本で使われているフランス語教育の教科書。
出版会社の協力を得て、研究室には30年以上
前のものから最新版までがそろう。

教室の外に学びの窓を

研究者として教科書に注目しているが、教員としては、学生がフランス語を学ぶには、教室で教科書を読むだけでは足りないと感じている。

「僕の授業は前期と後期各15回しかないので、教室の外でいかに学習するかが鍵です。だから授業では、日本語でフランス文化を紹介しているフランス人ユーザーやインスタグラマーがいること、スマホの翻訳機能を使えば簡単に発音チェックができることなどを紹介し、活用の仕方を教えています」

もともとICT（情報通信技術）スキルを生かす教材開発を研究しており、自らも動画を作ってはYouTubeに上げていた。その腕を見込まれ、コロナ禍の3年間は、NHKのテレビフランス語講座にリモート出演している。

「やるかどうかは学生次第ですが、異文化理解への窓を開ける鍵は、いろいろ渡したいと思っています」

最近うれしかったことは、フランスの大学で4週間の集中講義を受ける「サマープログラム」に今夏、様々な学部から9人の学生が参加したことだ。「4年ぶりの開催ということもあり、過去10年で最多の人数だったそうです。必修でもないのに1日5時間、4週間も勉強しに行きたいなんて相当なモチベーションですよ。観光や現地での買い物も積極的に楽しみ、自分の意見もしっかりと言っていました。引率しながら、いい経験になるプログラムだなと実感しました。同志社は留学生が多いことも影響しているのか、広い視野を持つている学生が多いように感じます」

異文化理解 好奇心こそ近道

自身が日本語に興味を持ったのは、柔道を習い始めた小学2年生の時。「ワザアリ（技あり）」「ユウコウ（有効）。初めて耳にした言語の、音の響きに魅了された。日本のアニメや漫画に夢中になり、人気コミックのフランス語版と日本語版を読み比べて漢字を覚え、リアルな日本語会話を吸収した。「学校で日本語を学んだのは高校に入ってからだけど、日本語能力試験に受かったのは漫画のおかげ」と笑う。好奇心こそ、語学上達への近道。高校3年時には東京で2週間のホームステイをし、大学時代は約1年間、ワーキング

ホリデーで山梨県のブルワリー（ビール醸造所）で働いた。

「誰もフランス語どころか英語もしゃべらない土地で暮らし、働き、バスケットボールチームにも入っていたから毎日いろんな日本語を使わないといけなかった。おかげで次第にコミュニケーションがとれるようになり、僕らと日本人には共通点が多いことにも気づけた。日本人は謙虚で必ずルールを守ると思っていたけど、審判が見ていないところでちょつと汚いプレーをする選手がいるのは世界共通。安心したよ（笑）」

研究でも授業でも、その根幹には、1人でも多くの学生に、より深く、しっかりとした異文化間コミュニケーションをとれるようになってほしいという思いがある。「フランスに対する漠然とした好印象は、ある研究者によれば『薄いガラスのようなもの』。すぐに破れてしまうものものです。だから学生には、ただフランス語の上達を目的にするのではなく、フランスだけでなく様々な国の言語、人、場所に対して、少しでも興味を持つてほしいですね」



海を越えた交流が 再び始まり 若者は伸びやかに 共感の輪を広げていく



SIEDとは

学生が主体となって国際交流イベントを企画・実施する国際センター留学生課の組織。本学のグローバル化推進と国籍を超えた相互理解の促進を目的として2013年10月、同課に組織された。現在は今出川校地に約30人、京田辺校地に約20人の学生スタッフ（外国人留学生含む）が在籍。国際交流ラウンジを拠点に、それぞれ多彩なイベントを発売に行っている。

長いコロナ禍を経て、同志社大学でも海外留学や研修、外国人留学生の受け入れが再び活発になってきた。コロナ禍を経て、国際交流のあり方の何が変わり、何が変わらないのか。様々な企画を通じて学生間の国際交流を推進しているSIEDを代表し、大谷さくらさん（今出川）と三輪玲以佳さん（京田辺）に活動内容や思いを語ってもらった。



文化情報学部3年次生
三輪 玲以佳さん
れいか

商学部4年次生
大谷 さくらさん

もともと人と何かをするのが大好き。高校3年生の時はコロナ禍でほとんど何もできなかったけれど、大学でSIEDのイベントに出会い、国際交流の面白さに惹かれて入りました。スタッフとして目指すのは、国籍を意識せず、「私たち」という一体感を生み出すこと。編み物が趣味で、かぎ針編みでカバンとポーチを作り、お弁当のおにぎり入れにしています。

国際交流をしたくて2年次生からSIEDのスタッフに。真面目で優しく、いろんな視点を持った理解のある人たちが集まっていると感じます。参加者に楽しんでもらうため、自分自身が楽しめるイベントをしようと心がけています。今は京都のまち歩きが楽しく、大学からの帰りに京都御所を通ったりしながら1時間ほど歩いています。特技の荷造りを生かし、早く海外に行きたい！

SIEDではどんな活動を しているのですか？

大谷…国籍を問わず交流できるイベントのほかに、国際交流ラウンジを開放し、週3日は昼休みにおしゃべりしながら日本語や中国語、英語などを学ぶ「Lunch Talk」を運営しています。

三輪…京田辺も基本的に同じですが、「Lunch Talk」に当たるものとしては週1

回の「Speak Up」があります。特に言語は決めず、当日来た学生に自由におしゃべりを楽しんでもらっています。

大谷…代表を作らず、スタッフ全員で運営するのもSIEDの特徴です。企画は学期ごとの会議で全員がつずつ出し、少人数のグループを作って実行していきます。私が初めて企画したのは2021年12月の風揚げ大会です。

三輪…私は趣味の編み物を生かし、夏を快適に過ごせるようにと今年の6月、布ぞうり

作りのイベントを企画しました。

活動を通じて意識や価値観に 変化はありましたか？

大谷…SIEDに入るまでは、したいことを人に話すのがなんだか怖くて、「自分でやつてしまおう」と思いがちでした。人に頼ったり、

いろんな留学生に声をかけたりすることで、自分の想像以上に物事が広がっていくことを学べたのはすごく大きいです。

三輪…企画のアイデアを出したときに、「それは無理」「じゃなく」「面白いね」って言ってくれるスタッフが多いんです。共感してもらえることが力になって、「一緒にやらない？」って、どんな外に働きかけていけるようになりました。

大谷…日本が一番安全だと言われているので海外に行くのを少し怖く思うこともあったんですが、留学生と話す中で、人の優しさや温かさを感じることが多くなりました。

三輪…留学生と話せば話すほど、本やネットだけでは分からない世界があることに気づかれますよね。

コロナ禍を経て、 活動に変化はありますか？

三輪…どれだけ「デジタル世代」と言われても、やっぱり対面の方が気軽に話せますよね。

大谷…うん、うん。コロナ禍が収まってきて散

策系イベントはできたので、料理や宿泊イベントも卒業までにしたいなと思っています。

三輪…イベント後のアンケートを見ても、食文化に興味がある学生は多いですね。和食文化体験も人気のイベントで。京都にある同志社大学はその点、扇子の絵付け体験や嵐山散策など、日本の伝統や文化に触れられる機会が多いと思います。

大谷…前に留学生の友達が、同志社大学はいろんな国から多くの学生が来ていて人気が高いと言っていました。それに加えて、日本らしさを楽しめる場所にあることも選ばれる理由のように感じます。

これからのSIEDに 期待することは？

大谷…同志社大学の学生みんなが留学生の友達を持つようになってほしいという理想があります。視野が広がるし、相手に配慮する気持ちも培われると思うので。留学生と関わる機会を作るための場所として、SIEDがみんなに知れ渡ってほしいです。

三輪…何かコンテンツを用意するのではなく、国際交流そのものに焦点を当てた大きなイベントをしてみたいです。国籍を問わず、みんな同志社大学の学生なんだっていうところで輪を広げて、いろいろできたら楽しいだろうなと思っています。



様々な企画を通じ、全ての学生が交流を深め合うSIED。参加者みんなが楽しめるイベントにするには、「自分自身が楽しめる企画であることが一番大事」と二人は口をそろえる。文化や風習が違っても、真っすぐな気持ちは相手に届き、共鳴し合う。コロナ禍での経験は、リアルで出会うこと、一緒に笑い合う大切さを改めて思い起こす機会となった。



DOSHISHA DNA

【ビジネスパーソン】

日本の美容家電を 世界に届ける

「グローバル・コミュニケーション学部でチャレンジしようと思った時、実は英語は全く話せませんでした」
現在、パナソニック海外マーケティング本部で世界

を舞台に活躍する小原歩南美さんはそう振り返る。
大学での学びや気付きは、今の仕事にどう生かされているのか。話を聞いた。

パナソニック株式会社
海外マーケティング本部

こはら ほんみ
小原 歩南美さん

2020年にグローバル・コミュニケーション学部を卒業してパナソニックに入社。マーケティング・コミュニケーション部で宣伝部門を担当する。学生時代の経験が、同社が経営理念とする「事業活動を通じて、世界中の人々のくらしの向上と社会の発展に貢献する」という考え方と結びつき、入社を決意した。

「やって、学んで、次に生かす」

小原さんの所属する海外マーケティング本部は、「家電部門の世界への情報発信本部」と位置付けられている。「入社以来、個人向け美容家電の海外向けプロモーションを担当しています。WebやSNSで発信する動画などのコンテンツ制作、新商品を売り出すためのマーケティング活動の推進、海外のインフルエンサーを使ったPRなどを行っています」

1年目から仕事を任せてもらえる部署で、動画の構成を考えたり、制作会社と打ち合わせをしたりと、担当業務は多い。「最初のうちは、分からないことが多くて失敗もありましたが、『やって、学んで、次に生かす』という感じでした」

海外との打ち合わせも多い。現地会社の販促・営業スタッフや国内の商品開発担当者らがオンライン会議で集まり、まずはプロモーションの方向性を決める。その後、小原さんが現地担当者らと1対1で詳細を詰めていく。

例えば、新商品を売り出す場合、市場や消費者の動向、顧客が何を求めているかなどのマーケティング調査を行い、その結果をもとに宣伝用の動画を作る。しかし、作った動画を現地担当者にプレゼンしてみると、「この服の色では顔色が悪く見える」「モデルのカメラ目線の笑顔に違和感がある」といった思いもよらない指摘を受けることがあるのだという。「細かな価値観や文化の違いに気付かないと、現地の感覚とズレたものになってしまう。意思疎通は大事ですね。入社1、2年目はコミュニケーションに苦労しました」

留学で気付いた、日本の良さと強さ

入社4年目の小原さん。1年目は電動歯ブラシ、2年目からはドライヤーやヘアアイロンなどを担当する。どれも身



近で日常生活に密着した商品だ。

「入社時の志望動機は、海外で働きたいというより、『優れた日本の商品を海外に届けて、人々の暮らしを豊かにし、同時に、海外での日本の存在感を大きくしていきたい』というものでした」。こうした、日本に軸足を置いた考え方をするようになったのは、学生時代の留学がきっかけだったという。

留学先のカナダは、予想以上に「多国籍」で、韓国、中国、インド、メキシコと様々な国の留学生が周りにいた。このような環境に身を置き、相手にとって日本は「異文化」なのだという、当たり前のことに気付かされたという。「異文化と触れ合う機会が多い学部だったので、海外も視野に入れて働きたいと思っていました。そんな時に留学して、改めて日本の良さ、強さに気付かされたんです」

カナダでは、「異文化」である日本食が浸透し、愛されていた。「留学中、お寿司を提供するボランティアをした時の反応も良かったです。食に限らず、日本の商品を通して日本の強さを発信できるんじゃないかと、日々感じるようになりました。その思いを叶えられる仕事に就けて、ありがたいと思っています」

徹底したコミュニケーションが生む信頼関係

「異文化に対する柔軟性、対応力、理解力は、大学時代の経験で育まれたのかなと思います」と話す小原さん。現地スタッフとのやり取りでも、「意見が違うのが当たり前」と思ってた前向きに取り組んでいる。大事にしているのが、「徹底したコミュニケーション」だ。

「お互いの目標地点は同じでも、途中のコミュニケーションが足りないと、ぶつかかることも多くなります。相手を理解しようとする、相手も私を理解しようとしてくれます。これを続けると、自然に信頼関係を築くことができます」。海外との往来も復活。小原さんも、昨年夏以降、ドイツ、アメリカ、カナダに出張した。「現地からもスタッフが頻繁に来日しています。やっぱり、相手の顔を見ながら議論するのは、コミュニケーションの取りやすさが違うし、議論も活性化しますね」。会えない時は、現地スタッフと密にチャットでやりとりするなど、常に深い議論ができる環境づくりを心がけているという。



心の動きに素直に従って、挑戦してみる

常に前向きで、自分の性格を「挑戦するタイプ」と分析する。それを意識するようになったのは高校の部活動、ダンス部だ。全国大会優勝の常連校。ダンス部に入りたくて入学を決めた。中高一貫の強豪校で中学から続けている部員も多い。高校から入って、うまくいかないこともあった。「3年間やりきった時、挑戦を決めた自分に感謝しました。失敗しても、それ以上に得られるものがある。英語の全く話せない私が、グローバル・コミュニケーション学部でチャレンジしようと思えたのも、この経験のおかげです」

学部には、豊富なゼミ、留学、外国に駐在する先輩訪問など、様々な経験ができる機会が用意されている。だが、それを生かし切るのにはなかなか難しい。「誰しも、『ちょっと興味あること』ってあると思うんです。少しでも興味を持ったら、その気持ちに素直に従って、とりあえずやってみたらいいのでは。ダメなら、次のことをやったらいいのですから」。学びの環境、成長のチャンスを生かせるかどうかは、自分次第。挑戦しないと始まらない、何事も。



今年度就職活動をした先輩からのメッセージ

〔「2023年度 就職活動に関するアンケート」から〕

文学部

困ったことがあればキャリアセンターを利用して、効率よく就活するのがおすすめです！

文学部

就職活動を終えてみて、凄いガクチカや難関資格よりも、自身の経験に基づく熱意をしっかりと伝えることが大切であると強く感じました。自分が熱意をもてそうなことを見つけるために、たくさん行動してみてください。応援しています。

文学部

就職活動を始めた当初は知名度のある企業を中心にすることが多いと思いますが、それを支えている中小企業にも魅力的な企業は沢山あると思います。また、この業界は自分に合わないといった決めつけをするのではなく、幅広く見ていくことが重要だと感じました。比較材料が多い方が、自分がしたいことを明確に見つけることができると思います。

社会学部

視野を広くもってください。自分がやりたい仕事は思った以上に色々な業界・職種で幅広い形で携わることができます。

法学部

キャリアセンターは本当に活用すべき。困ったことがあったら気軽に行った方がいい。大学によってホスピタリティーがピンキリらしいけれど同志社のキャリアセンターの方は、今思えばそんなことで相談に行くなというような些細な悩みにもとても親切に相談に乗ってくれた。

経済学部

早めに行動をすることと自分1人で進めようとしないうことだと思います。エントリーシートを出す際や面接前に、第三者に自分を見てもらうことはとても重要だと感じました。

経済学部

会社に入ってからギャップを感じないように企業分析をしっかり行ったあと、自分の気持ちに素直になり、将来のようになりたいか具体的にイメージしてから就活の軸を早めに決めておくと思います。

商学部

就職活動は、私の中では大学生活において1番辛いと感じた期間でした。しかし、それと同時にこれまでの自分を振り返り、自己PRを作成したり、ガクチカを作成する中で自分の強みは何だろう、自分は将来どのように生きていきたいのだろうと改めて考える機会が増え、より納得する就活に向けて取り組むことができたと考えています。誰しもが不安になったり、友達と比べてしまう瞬間があると思いますが、自分の人生なので周りとは比べず自分のペースで取り組むのが1番だと思います。

商学部

無理に早くから始める必要はないと思いますが、早くやればやるほど効率よく就職活動を進めることができるに違いないと実感しました。自己分析を早いうちから大まかにでも考えておくことが大切だと思います。

政策学部

初めから完璧を目指すのではなく、何回も面接やグループディスカッションに参加し、回数を重ねて慣れることが大切だと思います。また、第一志望であっても過度に緊張せず、落ちても大丈夫というくらい前向きに臨むことも必要だと感じました。

政策学部

私は公務員試験対策を大学2年次生の2月ごろから始めました。早め早めの行動は、後々良い結果につながると思います！自己分析、業界研究など、大変なことも多くあると思いますが、頑張ってください。

文化情報学部

とにかく色々な分野を見て、知って、自分の就活軸を確立させると就活が進みやすいと思います。焦らず頑張ってください！

理工学部

夏や冬に行われる様々なインターンシップに参加し、就職活動の視野を広げるべきだと考えます。また、自分の志望する業界や会社でもインターンシップに参加し、様々な会社を比較検討したほうがより良い就職活動ができると考えます。

理工学研究科

いきなり自分の将来やりたいことを見つけるのは大変かもしれませんが、そういう時は一度様々な企業を見てみるのも一つの手です。いろいろな説明会やインターンを経験することで企業の知らなかった一面を知れて、自分のやりたいこと、やってみたいことが見えてくると思います。応援しています。

生命医科学部

とにかく就活を諦めず、少しでも早い時期から始めておくべきです。自分は3年夏のインターンで2社応募しましたが、面接対策を一切やらずに落ちてしまい、すぐ後悔しました。インターンは選考有利になったりするので、夏冬問わず複数社行った方がいいと思います。

スポーツ健康科学部

就職活動は長丁場なので、一喜一憂せずに望むのがいいと思います。色々な人にESや面接練習をお願いし、またOB・OG訪問をして「働く」ということに対する自分のイメージを持っておくといいと思います。そうすると、自分の中の譲れない部分が見えてくるので、それを中心に企業選びをすると、自分に合った企業が出てくると思います。頑張ってください！

心理学部

とにかく早く始めることが大事です。油断せずに、できるだけ多くの企業を受けて、要領を掴んでいくといいと思います。初めての面接が第一希望の企業になってしまわないように、色々な企業を受けて練習した方が絶対良いです！

グローバル地域文化学部

就職活動はかなり辛いことも多いですが、何かしら行動し続けていれば、結果が少しずつ出てきます。何事もプラスに捉える楽しむというマインドで、家族、友達に頼りながら、たまにはリフレッシュしながら、頑張ってください！

開催する
主な支援プログラム

こちらに掲載していないプログラムもあります。詳細は、キャリアセンターホームページ、キャリア支援システム「e-career」、キャリアセンター掲示板を随時確認してください。

キャリアセンター
ホームページ

「e-career」



プログラム名	開催時期
就職ガイダンス	9月、12月
エントリーシートワークショップ	2023年10月～2024年7月(毎月複数回開催)
面接ワークショップ	2023年10月～2024年7月(毎月複数回開催)
グループディスカッションワークショップ	2023年10月～2024年7月(毎月複数回開催)
企業セミナー／学内企業説明会	2023年9月26日～29日 2023年11月11日～22日 2024年2月6日～22日
内定者座談会	10月～12月
公務員・公立学校教員業務説明会	12月

3年次生・大学院1年次生
向け特設ページ過去に開催した
セミナー・ガイダンスの
動画配信画面

※動画配信を行っていないセミナーもあります。

個別相談について
(対面・Web・電話)

キャリアセンターでは、経験豊かなキャリアアドバイザーやキャリアセンタースタッフが、進路や就職活動に関する悩みや疑問等の相談に対応します。相談方法は、対面・Web・電話から選択できます。相談を希望の場合は、「e-career」から予約してください。

【来年度就職を目指す皆さんへ】

納得のいく就職に向けて

来年度就職を目指す皆さんが気になるのは、数年続いたコロナ禍や、昨今のインフレ、円安等が自分たちの就職活動にどう影響するのかなどだと思います。この点については、悲観しすぎる必要はありません。日本国内では労働人口が減少し続けていることから、採用に熱心な企業が多くあります。また、コロナ禍等で業績が悪化する企業がある一方で、業績を伸ばしている業界・企業もあります。

大切なことは、「早めの準備と幅広い視点を持つ」「あきらめず粘り強く取り組む」「自分で考えて決める」の3点です。

キャリアセンターでは、様々な就職支援プログラムや個別相談で皆さんの就職活動をサポートしています。就職活動は情報戦です。キャリアセンターを積極的に活用しましょう。

就職を取り巻く状況と キャリアセンターの支援について

ここからは、本学の現4年次生・大学院2年次生の就職活動の状況と、キャリアセンターが実施する現3年次生・大学院1年次生向けの就職活動支援について説明します。

現4年次生・ 大学院2年次生の状況について

現4年次生・大学院2年次生である2024年4月採用の就職活動は、前年と同様に、企業の採用活動のうち、広報活動が「3年次生の3月」から、選考活動が「4年次生の6月」から開始のスケジュールとなりましたが、この日程によらない企業も多数あり、採用活動は全体として早期化しました。また、コロナ禍による採用意欲の停滞からの反動で、一転して採用意欲が回復しました。多くの企業では、インターンシップや説明会、面接等の採用活動がオンラインで実施されましたが、最終面接等の局面では対面で実施する企業もありました。

キャリアセンターでも、このような就職活動の動きに対応するため、昨年3月のキャリアガイダンスを皮切りに、新規を含む様々な支援プログラムを開催しました。就職ガイダンスや企業セミナー、個別相談等はオンラインでも行い、実家や遠方にいる学生も参加できました。

また、業界・企業理解を深めるために、今年2月に、約420社が参加するオンラインの学内企業説明会を開催し、説明会の内容はオンデマンドでも配信しました。OB・OGに参加いただいた企業も100社以上あり、後輩へのアドバイス等をいただきました。

就職活動中の学生を支援するため、今年の5月下旬以降学内で選考会を実施する企業採用選考会をオンラインで定期的に開催し、採用継続中の企業の求人情報を積極的に提供する等の支援を行っています。

現3年次生・大学院1年次生 向けの就職支援について

就職活動の早期化・長期化、採用に直結したインターンシップが増えている現状に対応するため、新3年次生対象のガイダンスを3月中旬～下旬に実施しました。学業の優先を前提としつつ、就職活動への早期からの準備を促し、インターンシップ参加に向けてのエントリーシート・面接対策等のセミナーを実施、学生の積極的な挑戦を後押ししました。

また、学生の活動開始時期が多様化していることから、1年間で3つの時期に分け、各時期に、ガイダンス、セミナー、ワークショップ等を開催、学生が就職活動をいつから始めても対応できるように、必要な知識やスキルが身に付く体系的なパッケージを用意しています。各プログラムはオンラインで開催し、キャリアセンターホームページ上でオンデマンド配信も行っているため、いつでも視聴できるようになっています。

また、就職活動の早期化に伴い、インターンシップの重要性が高まっているため、有力企業に協力いただき、夏期休暇中に、同志社大学の学生の参加枠を設けた同志社生限定インターンシップ・仕事研究プログラムも開催しました。

就職を取り巻く環境が変化していますが、就職環境の良し悪しにかかわらず、皆さんが企業にアピールすべきことは、主に、根拠に裏付けられた皆さんの強みと企業への熱意の2点です。また、皆さんが知っている大手企業や有名企業の多くは、就職環境に関係なく、常に「厳選採用」であることを覚えておいてください。大手企業や有名企業には、全国から何千、何万人もの学生からのエントリーがありますので、全員が面接選考までたどり着くことはできません。まずは、エントリーシートで自身をアピールすることが重要です。キャリアセンターで実施するエントリーシートセミナーに参加し、自分らしいエントリーシートの書き方を身に付けてください。

企業理解を深める企業セミナーを今年度は9月から開催しており、11月には約100社、来年2月には約300社の企業を招聘する予定です。ここ数年はオンラインのみでの開催でしたが、今年からは対面開催も徐々に復活させる予定です。学外で開催される合同説明会と異なり、学内企業説明会は、同志社大学生だけのために多くの企業が参加いただける点が大きな魅力です。現時点で興味がある業界・企業だけではなく、幅広い業界を見て比較し、職業選択の幅をできるだけ広げてください。

特に、皆さんが知っている企業は、一般消費者向けのビジネスを展開するBtoCの企業が多いですが、日本には、企業向けのビジネスを展開するBtoBの企業が数多く存在します。BtoBの企業の中には、世界でトップシェアを誇るような企業が数多くあります。知らない企業でも、ぜひ積極的に情報収集をしてください。

キャリアセンターでは、皆さんからの個別の相談にも対応しています。相談というと身構えてしまうかもしれませんが、就職活動について話を聞いてほしい、考えを整理したいので誰かと話したいといった

際にも気軽に利用してください。多くの先輩たちも、就職活動の進め方や、エントリーシートの書き方等様々な相談をしています。

就職活動では、一見すると明確な数値や基準のない中で採用・不採用が決まります。自信をもって提出したエントリーシートや履歴書が通過しない時や、手ごたえがあった面接が不合格だった時は、自分自身を否定されたような気持ちになるかもしれません。落ち込んだ時は、一人で悩まずにキャリアセンターを大いに頼ってください。

企業の求める人材

経団連が実施したアンケート（「採用と大学改革への期待に関するアンケート結果」2022年1月18日）によると、企業が新卒採用時に期待する資質の1位は、「主体性」です。2位以下には、「チームワーク・リーダーシップ・協調性」、「実行力」が続きます。企業が新卒の学生に求める力は、「自ら主体的に行動し、周囲を巻き込みながら、実行する力」と集約できるでしょう。

オンラインによるコミュニケーションは、直接対面で話すのとは異なる難しさがあります。これまで以上に相手の意見を傾聴し、そのうえで自分の意見を伝えることが重要です。オンライン面接では、通信が途中で途切れてしまう、音声聞きづらい、カメラが機能しない等、様々な問題が起こり、面接の緊張感が加わって、パニックになった学生もいました。トラブルを未然に防ぎ、万が一トラブルが起こった時にも落ち着いて対応できるよう、事前にPC操作に習熟しておく等の準備をしておいてください。

また、リモートワークが増えたことで、職場で仕事をしている時よりも仕事の全体像が見えにくい状態にあります。指示を待つだけの受動的な姿勢では、業務に支障が生じることがあります。これからの社会人は、これまで以上に主体的に課題を発見して、対策を考え、解決に向け挑戦し、業務を遂行する力が求められます。

最後に

採用選考の過程では、学生時代に力を注いだエピソードを通じて、皆さんがどのような状況でどのように考え、どのように行動したのかが問われます。しかし、コロナ禍の影響で、サークル活動、ボランティアやアルバイトが大きく制限された学生も多く、何をどのように伝えるのが難しくなっています。

大切なのは、何らかの目標を達成したという結果ではありません。目標を達成するまでにどのような努力をしたのかというプロセスを具体的に明確に伝えることが重要です。プロセスの中に、皆さんの強み、人間性、価値観、能力等が表れるからです。

「早めの準備と幅広い視点を持つ」「あきらめず粘り強く取り組む」「自分で考えて決める」の3点を意識しながら、自分を信じて前向きに就職活動に取り組んでください。



INFORMATION

2

2023 November

同志社校友会

Doshisha Alumni Association

同志社校友会 Doshisha Alumni Associationは、同志社設立10年後の1885年に「アルムニ会」として発足したのが、始まりです。主な目的は、卒業生の親睦と大学との連携を通じて学生をサポートすることです。現在、約36万人の会員となり、国内はもとより、各国にも支部があります。

同志社校友会 会長 松岡 敬



TOPIC

2020年春からコロナ禍で、経済的に困窮している学生支援のため、同志社大学と連携して2020年5月から6月にかけて商店街やスーパーで利用できる食生活応援クーポンを配布し一人暮らしの食生活サポートを行う事ができました。

その後も、「同志社校友会ランチプロジェクト」を立ち上げ、学内の食堂において、200円の補助をすることで、学生の経済的な負担を軽減するとともに、安定した食生活ができるようにしています。

2022年12月には累積で約33万人の支援ができました。

学生アンケートでは、感謝の声に加えて、「私も将来就職して社会的地位を上げて、このように後輩たちをぜひ支援したいと強く感じました」という声も寄せられ、支援の有益性を全国の校友と共有させていただきました。

今後も、様々な学生への支援を継続し、充実した学生生活を送ってもらえるよう対応してまいります。



同志社校友会ランチプロジェクト



学生アンケート



同志社校友会 活動の概要

① 卒業生とつながる

2023年8月現在、国内に48の支部、海外に36の支部が存在し、同志社校友会本部と連携しながら活動を行っています。「地元へ転職をしたい」「転職になって慣れない土地で生活するのが不安」「海外での勤務は家族も心配している」など、社会に出てから課題を抱える卒業生に対して、現地の校友がサポートをしています。



詳しくは
同志社校友会
ホームページへ▶▶▶



② 大学とつながる

同志社大学と連携した学生へのサポート活動を行っています。同志社大学が掲げる「VISION 2025」の推進を目的とした「リーダー育成事業支援」、「グローバル人材育成」への支援やその財源となる「同志社大学2025 ALL DOSHISHA募金」の活動支援、同志社フェアなどのイベントを通じた大学のプレゼンス向上のための「同志社ゆかりの地連携支援」などを行っています。



③ 学生を支える

「同志社校友会奨学金」、「同志社スポーツ奨学金」、海外留学生支援として「グローバル人材育成奨学金」など各種給付型の奨学金制度を通じて教育と学生生活の充実がはかれるサポートを行っています。

同志社校友会本部事務局

TEL : 075-251-4393

E-mail : info00@doshisha-alumni.org

クリスマス・イルミネーション点灯式



2022年度の様子

アドベントを前に各地でクリスマス・イルミネーションが灯り始めるころ、同志社大学でも点灯式を催しています。

京都の冬の風物詩として広く親しまれている今出川校地の点灯式では、西門を入れて北側に広がる、彰栄館・同志社礼拝堂・良心館に囲まれたサンクタスコートのヒマラヤスギに

約16,000個のLED電球が灯ります。

京田辺校地では、3代目となる2019年に植えられたヒマラヤスギに約6,500個のLED電球が灯ります。正門を入ってすぐの同志社ローム記念館前にあるため学外からも望むことができ、キャンパスのシンボルとなっています。

今出川校地

11月22日(水) 17:15～(予定)
西門北側サンクタスコート ヒマラヤスギ周辺

京田辺校地

11月24日(金) 16:45～(予定)
同志社ローム記念館前

※都合により、変更になる場合があります。ご了承ください。

第148回 同志社EVE 「今を紡ぐ、人を結ぶ」

同志社EVEは、毎年11月29日の創立記念日を祝う行事として、同志社大学生によって創り上げられてきました。毎年11月1日から28日までを「EVE期間」、11月26日から28日までを「EVE出店期間」としています。過去3年間は新型コロナウイルスの影響で制限がありましたが、今年度は制限を緩和し、学外の人々の参加も可能としました。

同志社EVEの理念である「学生の自主管理・自主運営」と「団体の活動の発露の場」を尊重し、学校の団体活動を広く知って頂く機会としています。今年度の完全対面開催は、将来の発展に向けたステップであり、多くの人々に希望を提供する創立記念行事となることを願っています。11月26日～28日、当日のご来場を今出川校地でお待ちしています。



第148回 同志社EVE公式HP
<https://doshisha-eve.com/>



今を紡ぐ、人を結ぶ
148th 同志社 EVE



「ゼミで学ぶ 魅力を語る」

幅広い領域の専攻から数多くのゼミがある本学。

それぞれ、どんなことを学んでいるのか。

ゼミ教員が、個性豊かなゼミの魅力を語ります。

「神学×現代社会の課題」



神学部
准教授

きたに かなん
木谷 佳楠 ゼミ

Kitani Kanan

私が専門とする実践神学という学問には、牧師の養成を行うという側面と、教会と社会との関わりについてどのように see (見て)、judge (判断して)、act (行動する) べきなのかを模索するという側面があります。時代の移り変わりに即して、「現代社会」における課題も変化しますので、ゼミで学ぶ内容は4～5年のサイクルで変更しています。今のサイクルでは特に、神学・宗教と環境問題について学んでいます。

各学期、先行研究レビューを一人一回発表し、学期末には「研究の問い」を設定したグループ発表を行います。グループでの発表にすることによって、上級生が下級生に参考文献の書式や脚注の付け方を教えるシステムになっています。

2023年度の発表には、ネイティブ・アメリカンに対する環境レイシズムと保守派キリスト教の関係性についての発表や、昆虫食や培養肉は食物規定がある宗教ではどのように扱わ

れるのかなど、気候変動によって変化する食文化と宗教について論じる発表がありました。13人いる今年のゼミは、皆さんが自分の意見を持って積極的に発言してくださるので、教員としてはありがたいメンバーが揃っています。

ゼミ生の声

「春学期は環境問題×宗教をテーマとしたゼミでした。中間は個人、そして期末ではグループで発表を行うので、尊敬する先輩や友人から良い刺激を受けつつ、自分の研究を深めることができる活気溢れるゼミです。楽しいゼミ合宿もあります。」「コーヒーが飲めるゼミ」「自分の普段の何気ない行動(特に消費行動)がどのように環境破壊や格差、差別につながっているのかを、宗教という、特に日本人からすれば思いがけない視点や考え方の枠組みを用いながら考えられるゼミ」など。

学びについて学び合う



社会学部
教授

こじま あきら
児島 明 ゼミ

Kojima Akira

私のゼミでは、国境を越える移動のなかで人はどのように育ち、学び、働き、次世代の育成に携わるのかについて、移動の多様性に目配りしながら探究していきます。

ゼミでは何よりも主体的な学びと他者との学び合いを重視しています。「人の移動と教育」を大きなテーマとしながら、3年次の春学期には3～4名程度のグループごとに説明すべき課題を設定し、関連文献リストを作成したうえで文献を読み進め、発表およびディスカッションを行います。

秋学期には、課題の解明に向けて調査を実施し、成果を発表したうえで報告書にまとめます。これまでに、「帰国子女の人間形成」「母親の経験と選択との関連性」「在日中国人留学生が抱える問題」「劇本殺」を背景に「学校コミュニティ内における母語教育」「父親アイデンティティの獲得まで」などのテーマでグループワークが実施されました。4年次には、グループワークを通して深まった問題や関

心に基づいて、各自、卒業論文に取り組んでいきます。他者と隔たりをつくるのではなく、豊かな出会いや出会い直しを可能にする学びを学生とともに模索し続けています。

ゼミ生の声(嶋田朱里さん)

今学期に私のグループは、「アイデンティティ」をテーマに文献調査を行いました。同じゼミに所属する学生でも、それぞれが持つ背景や経験は様々です。ゼミ生同士のディスカッションを通して、新たな視点を学ぶことができました。また、「外国にルーツを持つ子どもたちの居場所づくり」の活動に参加し、子どもたちと向き合い、実体験を通して学ぶことの重要性に気付きました。様々な人との出会いが、自分を見つめ直し、考えを深めることに繋がるのだと、ゼミでの学びを通して実感しています。

Seminars

learning objects of

子どもが学校に適應するための 支援方法を探究する



心理学部
教授

こうやま たかや
神山 貴弥 ゼミ

Kouyama Takaya

私のゼミのテーマの柱は、子どもが学校に適應するための支援方法を探究することです。不登校になったり非行に走ったりと不適応を起こした子どもに対するケアが必要であることは言うまでもありません。しかし一方で、このような不適応状態に陥らないために学校環境を整えたり、子どもの社会的能力を高めたり、不適応状態に陥りそうな子どもに対する予防的な支援を行ったりすることも重要です。私のゼミでは、こうした問題意識のもと学校適應に関わる研究を進める学生たちがいます。

一方、ゼミでは学生たちの自主性を重んじており、他のテーマで研究を進めることも認めています。卒論研究は、学部での学びの集大成として位置づけられますので、自分が興味・関心をもつテーマについて追究してもらいた

いと私自身も強く思っています。したがって、私の専門である教育心理学分野以外の研究テーマで卒論研究を進める学生たちも多く、そうした学生が半数以上になる年もあります。

また心理学部の方針でもあるのですが、私のゼミでは卒論研究をグループで行うことを推奨しています。グループで研究を行う上では、葛藤を起こす場面もあり、折り合いをつけながら進める必要がある一方で、協力したり触発したりすることができるともあります。こうした切磋琢磨する中で、社会に出てからも通用する社会的な能力を身につけてほしいと願って、日々ゼミでの指導・支援を行っています。

生物化学工学による DDS



理工学部
准教授

たはら よしろう
田原 義朗 ゼミ

Tahara Yoshiro

私は理工学部化学システム創成工学科で、同学科の松本道明教授と共に生物化学工学研究室を主宰しています。当学科では学部3年次までに化学工学の基礎を学習し、化学的な現象の定量的な理解を深めます。その後、4年次に研究室に配属され、それぞれの先生のもとで専門的な研究を行います。学部3年次の生物化学工学という授業では、実社会でも役立つというアミノ酸や抗生物質など、生物によつて生産される物質をプロセスとして合理的に製造するために必要な基礎知識を学習します。この中でも本質的に重要なことは化学工学の定量的な理論であり、それを生物学的な現象に適用する場合でも基本的な戦略や方法論は共通であることがわかります。4年次の研究で対象が変わっても同様で、私の研究グループでは新しいゲルやエマルションを使って体内への薬の吸収や分布を

制御し、最終的な薬の有効性の向上や副作用の低減を目指したドラッグデリバリーシステム(DDS)の研究をしています。この研究も全体として最適なシステムを創り出すことを目的としており、3年次までに学んだ基礎的な化学工学が大いに関連しています。このように化学工学を基本としながら、DDSにおける新しい発展が生み出せるよう日々研究をしております。

ゼミ生の声

「本研究室は、主に環境・人体に焦点を当てた研究を行っていますので、比較的生物に興味をもった学生が多数入っている印象があります！」

「私はがん治療の副作用である口内炎を治療する創傷治癒剤の開発に取り組んでいます。動物実験やリリース実験を行い、化学工学のアプローチから評価をしています。先生のサポートと学部生時代の知識が、新たな発見と自己成長を支えていると感じます」